

福島県郡山市の林間学校におけるダンス活動の意義と課題

弓削田 綾乃 (早稲田大学)
竹内 エリカ (一般財団法人日本キッズコー
チング協会)

1. はじめに

3月の東京電力第一原子力発電所の事故を受けて、屋外活動を制限されている地域は広範囲にわたる。その一地域である福島県郡山市では、教育委員会主導のもと、児童の夏季林間学校が市内で開催され、短時間のダンス教室が組み込まれた。この実験的なダンス活動を対象として、現状と行政の取り組み、子どもたちの反応と成果等を明らかにし、被災地での意義と課題を検討する。

2. 郡山市湖南林間学校の概要と子どもたちがおかれた現状

2011年7月30日から8月10日の間、3回に分けて、児童と保護者約450名を対象とした「郡山市湖南林間学校～君の笑顔は郡山の希望 いっしょにあそぼう！」が開催された。郡山市や郡山市教育委員会等からなる「平成23年度郡山市湖南林間学校実行委員会」の主催である。

目的は、「屋外の活動が制限されている子どもたちに、夏休み期間中、湖南地区で宿泊体験活動を行うことにより、恵まれた自然環境の中で安心して、思う存分、笑い・楽しみ・学ぶ活動機会を提供する」(郡山市教育委員会資料より)ものである。内容は、水遊び、星空観察会、自然探索、工作など盛りだくさんだった。これらのプログラムの1つに、「楽しく体を動かそうダンス教室」があった。

開催の背景としては、教育現場での運動機会の減少が大きい。放射能の影響下、屋外活動を1日3時間以内とする「3時間ルール」に従っているからだ。それは、どのような影響をもたらしているのだろうか。

第1に運動機会の減少があげられる。短期的に顕著なのは、運動不足だろう。長期的には、各発達段階で獲得すべき運動能力の欠如、心身の健全な成長の妨げなどの可能性を否定できない。

第2に運動に直接関わらない面でのストレスがあげられる。家庭の方針によって、屋外体育禁止、学校給食禁止などの格差、家庭内不和などが生じ、子どもたちの心に深刻な影響を与えているという。また度重なる風評被害に苦しむ姿も見受けられた。

これらを受けて郡山市は、心の問題に対処するプロジェクトを始動させる一方で、運動機会を提供する市内林間学校や県外キャンプへの呼びかけなどによって、選択肢の充実に努めている。

3. ダンス教室での反応

ダンス教室は、低学年グループと中・高学年グループとに別れて実施された。いずれも短時間だったため、リズムダンスをコーチが振り移して発表する形式だった。目的としたのは「思い切り体を動かす楽しさ、リズムによって表現する楽しさ、心の解放感、仲間との共感覚」である。事例として、子どもたちの感想をいくつかあげたい。

①全身運動の充足感…「いっぱい踊って楽しかった」「おなかぺこぺこ」等、比較的平易でメリハリのある踊りが、適度な全身運動として、充足感を与えていたと考えられる。

②達成感と解放感…「もう1回踊りたい」「次はいつ来るの?」「また来てね」等からは、達成感・充実感が推測された。また、「全部踊れて嬉しい」「みんなと踊れて楽しい」等、リズムに心と体をゆだねた達成感、仲間とのつながりによる解放感を味わったと考えられる。次に、子どもたちの変化の事例をあげたい。

①仲間の輪に入れた男児…前半は母親から離れられなかった子が、休憩時のコーチや仲間とのふれあいを経て、後半子どもの輪に入り、ステージ発表をやり遂げた。自立の一步と推測される。

②笑顔が引きだされた男児…無表情で動きが小さかった男児が、コーチの働きかけによって、笑顔でいきいきと踊るようになった。ダンスで心の状態を押し量り、対応した結果の変化と考える。

③鑑賞により心を開いた女兒…「自分が踊るのは恥ずかしくて嫌」と座っていた高学年女兒が、コーチたちのダンス鑑賞後、周囲の人々と積極的に交流していた。彼女なりのダンスとの関わりによって、心が開かれたのではないかと考える。

4. おわりに

運動不足や過度のストレスを引き起こす現状に対して、行政側は、環境を整え、イベント等による選択肢を用意して要望に応じている。しかし日常的な運動内容については、各校の判断に任せざるを得ない状況である。こうした日常的な運動活動を充実させるために、成長段階にあわせた屋内運動の奨励と環境整備が課題と考える。そして、子どもたちの現状を踏まえると、心身の問題への適切な対応のために運動を活用することも視野に入れる必要があるだろう。

それらに応える活動のひとつとして、ダンスが有効であることを、本研究は提示していると思われる。「短期的支援よりも長期的支援を」との声に応え、単発的支援の継続による支援や、教育現場でダンスを実践する人材育成への支援などが、肝要だと考える。